

第4話

長屋再生は、人生の再生と不可分の関係

弘本 由香里

Written by Yukari Hiromoto

写真：太田順一

はじめに

二〇〇四年一月、共著で『大阪新・長屋暮らしのすすめ』（橋爪紳也編・創元社刊）という本を出版した（本誌九四頁で紹介）。二〇〇三年三月、大阪市立住まい情報センターで開

催した「大阪長屋サミット」で出会った面々が中心になって共同執筆したのだが、筆者は、同書の取材・執筆と同時併行で当連載を行ってきたものである。

当連載でも繰り返して述べてきたが、近世から近代を経て、高度経済成長期まで、大阪は職・住・遊が一体の、都市居住の文化が息づく、見事な長屋のまちだった。都市に暮らす知恵の結晶、それが大阪の長屋だといって

も過言ではない。その歴史の蓄積が、他都市に類を見ないほど多様に発展した長屋群と、魅力的なまち並みを生み出していったのである。

そして今、その価値を再発見し、新たな命を吹き込んで、住まい・商いの場として



再生する長屋がある一方で、消えていく長屋がある(住之江区西住之江界わい)

再生する動きが、あちこちで芽生えている。新世代の長屋居住者たちは、長屋の何にか、何を再生しようとしているのか。そこに、未来に向けて本当の長屋再生のあり方を問う鍵を見出すことができるのではないだろうか。

巨大で新しい都市開発よりも、むしろ既存の地域資源を活かした持続的なまちづくりが求められる時代に、私たちは生きていくのではないだろうか。そんな時代の大きな流れを背景に、大阪の長屋再生ムーブメントを、人とまちや環境の関係を問い直すきっかけの一つとして捉えてみたい。その思いを反映して『大阪 新・長屋暮らしのすすめ』では、都市住宅としての大阪長屋の歴史の変遷・特徴から再生現場の技術と思想、新・長屋暮らし人の声、そしてこれから長屋暮らしを始めた人への手引きまで、長屋を巡る知恵の数々を収録している。

同書には、約三〇年に渡って長屋の研究に携わり、約一万棟の長屋を見てきたという、大阪の長屋研究の第一人者・和田康由氏をはじめ、長屋との長い付き合いを経て再生に取り組んでいる専門家、あるいはごく近年、長屋との運命的な出会いをきっかけに再生を手がけた生活者まで、さまざまな立場と経験を持つ人々が登場する。そのことによって、長屋の生命としての奥行きが、長屋に関わる多様なステークホルダーに共有されることを願っている。

さて、当連載の第一話では、上記の和田康由氏の研究に取材し、大阪が誇るべき都市住宅・長屋文化の特徴を概観した。第二話では、空堀商店街界隈における長屋再生の動きを取材し、持続的・内発的都市再生の鍵を探り、第三話では、中崎町界隈の長屋を舞台に、ニューカマーとオールドカマー、旧世代と新世

代の文化が、どのようにぶつかりあい、そこからいかに新たな規範や文化を創造し得るか、ムーブメントが問いかけてくる声に耳を傾けてみた。

そして、第四話（最終回）の今回は、取材を通して出会った新世代の長屋暮らし人のうち、四人の方の長屋との関わりと、その背景にあるそれぞれの生活観・人生観の一端にふれながら都市再生の核心に迫ってみることにした。

長屋再生ムーブメントを一つの入り口に、これまで取材を重ねてきたわけだが、実は取材を進めるにつけ、再生長屋以上に、長老の現役長屋の迫力に圧倒され続けた。また、いったい何をもって再生長屋と呼ぶのか、再生長屋と現役長老長屋の境界線がみるみる

新世代の 長屋暮らし人とは



長く住み継がれてきた近代長屋の圧倒的存在感（住之江区西住之江界隈）



小さな改修を重ねながら生き続けている長屋（住之江区西住之江界隈）



融けあつて分からなくなっていくのである。例えば、戦前から生き続けてきた長屋は、多かれ少なかれ、何らかの改修を行つて命をつないできている。大胆に外観や設備を変更しているケースも多い。しかし、それは、長寿化であつて再生とは表現されないことが多い。一方で、ほとんど建設当初の姿に戻すような地味な改修が、それこそ再生と呼ぶにふさわしい営みだと新鮮に感じられるケースがある。また、必ずしも、廃屋になつた建物の再利用を指して再生と呼ぶわけでもない。

そこで、私なりに独断ではあるが、一つの結論めいた考えを編み出した。再生長屋であるかどうかは、その改修方法や利用形態によつて決められるものではなく、そこに暮らす人が新世代の長屋暮らし人の意識を持つているかどつかによつて決まるのではないかと考えたのである。

さて、そう考えた場合、それでは新世代の長屋暮らし人とはどんな人を指すのか、という問題が残る。ともすると世間では、長屋再生ブームが、若い世代によつて成り立ってい

ると思われがちである。もちろん、若い世代の共感を得ていることは確かである。しかし、実際に長屋を再生して、住まい・商いの場として活用しているのは、決して若い世代だけではない。むしろそれなりの人生経験を積んで長屋を選択する、中高年世代が意外に多いことにも気付かされる。

つまり、新世代の長屋暮らし人とは、老若男女を問わず、自らの価値観によつて、長屋の価値を再発見・再構築し、長屋を住まい・商いの場として選択し、自らの人生を更新・表現していく人と考えたい。その際、長屋再生は、人生の再生と不可分の関係で行われていることに注目したい。

人生の転機・成熟期を 長屋で切り拓く

新世代の長屋暮らし人たちが、長屋を選択した事情はさまざまであるが、その背景を大きく二つに分けるとすると、長屋で育つたという居住履歴がある人と、そうでない人とに分けることができる。

長屋再生を手がける人の中には、実は過去に長屋で育つた居住履歴を持つ人が少なくない。けれど、逆に中高年になって初めて長屋を住まい・商いの場として選択したという人もいないわけではない。若年でなく、中高年での長屋との出会いの物語は、人生の年輪や機微とあいまって、魅力的である。



オープンな長屋再生複合ショップ「窓」の空間（中央区空堀商店街界わい）



長屋再生複合ショップ「窓」に和雑貨店「我趣 WARE・SHU」を開いた紺野公子さん

その一人が、空堀商店街界隈の長屋再生複合ショップ「窓」に、「我趣 WARE SHU」という和雑貨店を出店している紺野公子さんだ。紺野さんの住まいは、大阪市の北に接するベッドタウン「緑地公園」近くのマンションである。空堀に店を持つまでは、長屋暮らしとは全く無縁の生活だった。

「熟年期には、便利な都会のマンション暮らしを卒業して、夫とゆつくり田舎暮らしをしてみたい」。将来に向けて、そんな憧れのイメージを抱いていたという。その夢が、やがてまち中の長屋ショップへと、大きく方向を変えて動き出すことになる。

たまたまテレビ番組で紹介された、空堀商店街界隈の長屋再生事例に、田舎の民家のイメージが重なり、思いついて空堀をたずねてみたというのだ。ちょうど、からほり倶楽部（空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト）が「窓」の立ち上げ準備を始めているところだった。

運命の歯車が偶然噛み合ったとしかいえないかもしれない。「窓」の入居者説明会に参加し、家賃の安さも手伝って、趣味の延長で和風雑貨を販売してみようと思いつき、出店を決断する。熟年期の人生の物語は、思いがけず、長屋を舞台に切り

拓かれることになったのである。

長屋との出会いが紺野さんの心にもたらした喜びには計り知れないものがあったようだ。紺野さんにとって、商売はもちろぬ、内装工事など、生まれて初めての経験ばかりだったというが、友人たちの手伝いで工事を成し遂げ、ともに苦労した同居の五店舗の仲間とは家族のような関係になったという。二〇〇二年七月に店は無事オープンした。「夏は暑いし、冬は寒いし、儲かるわけでもないけど、この店には手をかけた分ものすごく愛着がある」と。

また、郊外のマンション暮らししか知らなかった紺野さんにとって、未知の世界だった長屋のまちの付き合いに、「この近所の人たちが『これ使ったら』というんなものを持ってきてくれたり、声をかけてくれたり。ここへ来て初めて、地藏盆などの年中行事も知りました。人間は一人では生きられないんだということを、ここへ来て実感しています」という。人生はいつでも更新可能な柔らかなさを持つているのだと、その可能性が長屋のまちとの関わりによって、エンパワーされたのだと感じさせられるのである。

原風景・原体験から 命の寄る辺を探す

前項の冒頭で、新世代の長屋暮らし人たちの背景を大きく二つに分けると、長屋で育つ

たという居住履歴がある人と、そうでない人がいるといった。そのうち、長屋で育ったという居住履歴がある人にも二通りある。もともと住んでいた長屋を再生するというスタイルと、新たに自分の求める長屋を探して再生するというスタイルである。

後者の一人が、阿倍野区丸山通の一角にある長屋に暮らす柳生博之さんである。幼いころ柳生さんは、整然と区画整理されたまち並みが広がる、阿倍野区阪南町の長屋に暮らしていたという。阪南町は、良質な近代長屋が美しいまち並みを形成する地域である。しかし、幼いころの柳生さんにとって、まっすぐな道路が走る平面的なまちは味気なく、もっぱらの遊び場が、今、柳生さんが暮らす、「聖天さん」にほど近い界隈だったという。

路面電車「阪堺電軌」の「松虫」駅から「天下茶屋」駅方面に向かう途上、大阪では珍しく起伏の多い地形。丘や崖に沿って、道は曲折し、角を曲がると思わぬ眺望が開けることもある。緑の繁った洋館があるかと思えば、複雑な地形に合わせて建てられたユニークな形の長屋が並ぶ。まるで、おとぎの国にでもさ迷い込んだような気分を味わえる界隈である。幼心に柳生さんが、このまちに心ひかれた理由はよく分かる。

だから「ずっと」「聖天さん」の近くに住みたかった」のだと柳生さんは語る。幼いころの原風景・原体験が、柳生さんの住まい探し・住まいづくりの原点になっているのである。さらに、「地面につながる暮らしはマンショ



地形に沿って建つ長屋が独特の景観をつくる(阿倍野区丸山通界隈)

ンでは得られないもの」と、「十数件の長屋を見て回り、ここだと一目ぼれして決めた」のが、現在の住まいとして選んだ長屋だという。

その後、建築家・六波羅雅一氏(六波羅真建築研究室)の力を借りて、改修プランをつくり、家主さんの承諾を得て、施工にこぎつけている。妥協しない物件探しから、改修の実現まで、粘り強いアプローチを可能にしたのは、原風景・原体験に根を張った揺るぎない自らの住まいづくりの感性だろう。

二〇〇三年五月に入居して以来、「木や漆喰の壁が呼吸していて、空気も気持ちいい、

「木の家は手をかければかけるほど輝きだすから、柱を磨いたり掃除をしたり、庭の手入れをしたり、毎日楽しくてたまらない」と、念願の地での長屋暮らしを満喫している。その様子は、都市の中にあつて、自然に近い住まいである長屋と人の応答関係が可能にする、原風景の再生、命の再生そのものではないかと思えるのである。



広い仙裁から光の差し込むリビングで、ゆっくり時を過ごす柳生博之さん

二世代目は何を受け継ぎ、何を生み出すのか

親の世代から、住まい・商いの場としていた長屋を受け継ぎ、次世代として再生するケースは、潜在的な可能性としてみれば、最も多く存在するものかもしれない。そのうちの顕在例として、非常に印象的だった二つのケースを紹介したい。

一つは、住吉区我孫子の長屋を二世帯住宅に再生して暮らす、藤村欣也・若さん夫妻と若さんのご両親一家である。昭和三五年、若さんのご両親は、商店が軒を連ねる表通りに並び、一軒の長屋に入居。以来、その長屋で三人の子どもたちを育て上げ、子どもたちが巣立つて後も、家族の思い出の詰まった、その長屋で暮らし続けてきた。

お父さんは技師、お母さんは一階で長年ブティックを営んできた。職住一体の暮らしである。しかし、二年前、ブティックを閉めたのをきっかけに、店舗兼住宅だった長屋を、二世帯同居の住まいへと改修する案が実現に向けて動き出した。道路に面して開いていた店を閉めたことで、寂しくなってしまう通りの表情を、少しでも明るくしたいという思いもあったという。今、まち並みの中に、モダンでチャームिंगなサーモンオレンジピンクのファサードが、自然に融け込んで、やさしい表情をたたえている。



まち並みにチャームिंगなサーモンオレンジピンクのファサードがやさしく溶け込む（住吉区我孫子界わい）

築四〇年以上の長屋を改修しても十分な寿命が保てるのか、連棟の長屋を改修しても構造的な問題はないのかなど、改修に際しての物理的な不安の一つひとつを、丁寧に解きほぐす役目を担ったのが、改修をコーディネートした、(株)アートアンドクラフトの専門スタッフ(コーディネータ・中川富貴子氏/設計・岩田雅希氏/代表・中谷ノボル氏)だった。



藤村若さん親子、二世帯の暮らしを築40年のりっぱな梁が見守る

けに、階段と部屋の間や部屋と部屋の間には、あえて仕切りをつくらずオープンに」、そして、「屋根裏に収納スペースを設けたり、一階に納戸をつくったり、二世帯分の収納に工夫している」。

生まれ変わった長屋には、新たに施された無垢の床材やペイント仕上げ風のクロスが張られている。見上げると、吹き抜けの空間に、築四〇年の長屋の立派な梁が姿を現す。家族



一間半の長屋は、お客さんにくつろいでもらえるジャストサイズだという鮭職人の徳力修司さん(天王寺区空堀町界わい)

を守ってきた梁に見守られ続けている安心感がLDKに漂う。一世代目から二世代目へ、確かに歴史が受け継がれ、同時に確かに新しい歴史が刻まれ始めている。新しい感性の受容と、世代を超えた価値の継承、その調和の答えの一つを見る思いがする。

同じく、アートアンドクラフトの中谷ノボル氏が手がけたケースの一つに、天王寺区空堀町の長屋で鮭屋を営む徳力修司さんの店舗「弥助」がある。

昭和二九年建築の長屋に、徳力さんのお父さんが「弥助」を開いたのは、昭和三五年のこ

とだという。お父さんから受け継いだ店を、数年前に徳力さんは改装している。しかし、一階の店内はほとんど手を加えていないのではないかと思うくらい、元の姿を留めたままである。再生長屋とは思えないかもしれない。「もともと物持ちがいい家で、建物も道具も技術も、みんな使い続けてきた骨董品みたいなもの。それは、うちではあたりまえのこと」。改装にあたって、徳力さんの同級生でもある中谷さんも「時代を感じさせるものはできる限り残した方がいい」とってくれた」といふ。白木造りのカウンターも四〇年もの、

網代も四〇年もの、造り付けの食器棚や照明器具も当時のままである。

なぜ、筆者はこの長屋を印象的な再生長屋の一つと感じ、その主を新世代の長屋暮らし人と捉えるのか。それは、徳力さんが、自らの価値観によって、長屋の価値を再発見・再構築し、長屋を商いの場として選択し、自らの人生を更新・表現している人だと感じられるからである。

徳力さんは、大学卒業後いったん企業に就職しながら、画一的なサラリーマン生活の中で、改めて父の職業である鮭職人のアナログ



先代から受け継いだ空間、時代を感じさせるものはできる限り残した改装

な仕事の価値や魅力に気付き、父の後を継ぐ鯨職人の道を選んだのだという。三年前にお父さんが他界してからは、妻の聖子さんと二人で店を切り盛りしている。

「父は本当に古い職人で、基本中の基本をやってきた人。父がこだわっていた大阪ならではの「箱鯨」や「蒸鯨」を、僕も大事にしています」と、今ではほとんどの鯨屋から姿を消してしまった、大阪名物の「蒸鯨」を守り続けている。古いものに宿る価値を、自らの感性で再評価し、再生しようとする二世代目の静かな闘志が伝わってくる。「なんでもないことをやり続けること、継続することほど難しいことはないですよ」と。まち中の小さなお鯨屋さんが、一つ二つと姿を消す時代の逆風に確信を持って立ち向かう、徳力さんの鯨職人としての挑戦が続いている。

その腕を目当てに、ハレのひとつときを楽しみにやってくるお客さんが増えているという。「一番大事なのは、人との触れ合い。一間半の長屋は、お客さんにくつろいでいただけのジャストサイズ」だと。アナログの力は、長屋でこそ発揮できる、二世代目の新しい魂がこもった再生である。

第四話の終わりに

新世代の長屋暮らし人の中から、四人の方の長屋との関わりと、その背景にあるそれぞ

れの方の生活観・人生観の一端にふれてきた。まさに、長屋再生が、人生の再生と不可分の関係で行われていること。その状況がリアルに伝わってくる。

最後に、こうしたかけがえのない人生の営みの一つひとつから、何を学ぶべきかを考えてみたい。一言でいえば、都市再生とは、本来、人生の再生と不可分のものであり、人の再生に結びつかない都市再生、あるいは人の再生を疎外する都市再生は、都市再生とはいえないということに尽きるのではないだろうか。

前項に登場する、中谷ノボル氏は、都市におけるストック・リノベーションをライフワークとしているが、そこに至った背景の一つに、阪神・淡路大震災の住宅復興に関わった際の苦い経験があげている。被災地の再生のために、住宅復興計画を立て、一日も早い復興を目指して努力した。ところが、建設戸数が計画を上回り、まさに建物が再建されても、まちが再生されたとは感じられない。あたりまえのことかもしれないが、まちが再生されるということは、建物が建てばよいということとは全く違つのだということ、思い知らされたというのである。

同じように、都市再生を人の再生の側から構想していくこと。それが、長屋を巡る旅から得た最も大きな教訓である。

長屋再生ムーブメントを、ともすると一過性の流行現象で終わるものだろうと醒めた目で見る人も多い。けれど、ことはそれほど単

純ではないだろう。なぜなら、新世代の長屋暮らし人たちは、決して一面的・同質的な存在ではないからだ。多様な価値観、人生経験を持った、多世代に渡って層をなす人々が、流行とは異なる軸を生み出す可能性を秘めて存在している。

人の再生という文脈から都市再生を構想しようとするとき、人生の再生を、長屋再生を通して達成しようとしている、新世代の長屋暮らし人の声に耳を傾けてみる価値は計り知れないほど大きい。とりわけ、まちの大半が長屋という独特の都市構造からスタートした大阪において、その意味は極めて重いものである。こうした視点からの都市政策や制度設計の展開が望まれる。

取材の中で、長屋をめぐる魅力的な人生と至言の数々に出会ってきた。それらを糧に、連載終了後も、長屋再生や都市再生をめぐる考察を続けていきたい。取材・執筆にご協力くださった方々に、心から謝意を表し、ひとまず当シリーズを終えたいと思つた。

(大阪ガス エネルギー・文化研究所 客員研究員)

CEL

訂正とお詫び

第一話(六五号)の七八頁の二つの図の下「(和)田康由氏作成資料をもとに作図」を、「(和)田康由氏作成資料の一部を転載」に訂正し、お詫び申し上げます。

第三話(六七号)の八八頁、三段、二行目の「若い女性一人が」を、「若い男女二人が」に訂正し、お詫び申し上げます。